



2008年公演より©谷古宇正彦

まほろば

——歴史を続かせているもの

二〇〇八年、若手劇作家とベテラン演出家によるコラボレーション企画「シリーズ・同時代」第三弾として上演された、蓬萊竜太「まほろば」。男芝居の蓬萊が、女六人による女ならではの物語を書いたことで大きな話題となり、さらに第五十三回岸田國土戯曲賞を受賞した。蓬萊の新境地の作品、待望の再演である。

文◎徳永京子(演劇ジャーナリスト)

親兄弟でも親友でもパートナーでもなく、知りあつて間もない人から言われた何気ないひとことが、ブレイクスルーの大きな引き金になることがある。

社会的にはまったく陽の当たらない男達が、自らを縛る運命を必死で、そして不器用に切り拓いていく。ささやかなヒーローの時間を繰り返し描き、「男芝居の蓬萊」と呼ばれていた蓬萊竜太に、「女性だけしか出てこない芝居を書いてほしい」と提案した栗山民也の言葉は、まさにそれだった。

そして、その案を受けて蓬萊が書いたのが、十代から七十代まで、ほぼ各世代の女性をひとりずつ登場させ、生理、妊娠、閉経という女性特有の体の問題をモチーフにした物語、「まほろば」だった。あとから聞いたところによると、妊娠の仕組みと女性の体の機能について一から調べ、傍らに置いた妊娠カレンダーと照らし合わせながらの執筆だったという。つまり、この作品で新境地開拓をしてやるという演劇的野望は、少なくとも書いた当時の蓬萊にはなく、素直を通り越して怖いもの知らずだったと言えるだろう。

だが上演の翌年の二〇〇九年、この作品で蓬萊は「演劇界の芥川賞」と呼ばれる岸田戯曲賞を受賞。当時、審査委員長を務めていた井上ひさしに「豪快にして巧緻、軽妙にして深い思想を秘めた傑作です。」と絶賛されることになる。「男芝居の蓬萊」が「女性だけしか出てこない芝居」で岸田を獲ったことは、皮肉ないはずではなく、この人の劇作家としての懐の広さの証明になった。

この戯曲が生理、妊娠、閉経をモチーフにしているの先に書いたが、テーマ自体は別にある。それは歴史だ。さらに言えば、「歴史は、続いていくのか、続けていくものなのか」と私は思う。

二十〜三十年前まで日本では、成人↓結婚↓出産↓子育てというサイクルは、他にはほとんど選択肢のない常道だった。「まほろば」で、お雛子の音や女達の話題の中で存在感を示す祭りは、そうした社会のシステムが支えてきた。主人公ミドリは、そうした社会通念が崩れ始めた時代の女性である。パブルの後押しもあり、仕事という選択肢があった世代だからこれは、のどかに続いてきた旧世



代の歴史に対して異を唱え、あえて歴史を続けることを選んだひとりの女の話かと言えば、それは違う。妹のキョウコは前述の社会通念が完全に崩壊したあとの世代で、緩やかな結婚・妊娠観で生きているが、好きな相手の出自で悩んでいる。母ヒロコは、真つ当な結婚と出産をして立派に旧家を守ってきたはずが、男の子を産めなかったというコンプレックスがいまだに消えない。つまり、ひとりとして「続いてきた歴史」の安全な居場所など持っていない。世代や地域によって問題は違えど、ひとりひとりが意識的に何かを選択肢することでは、歴史は続いていかなないのだ。祭りの神輿を汗だくで担いでいるであろう男達もまた、その時計の中にいる。

「あの蓬萊竜太が女性だけの芝居を？」に気を取られてしまった初演を反省し、三年ぶりの再演では、登場しない男性達にもじっくり思いを馳せてみようと思う。